



TITLE:

総合討論

AUTHOR(S):

加藤, 剛

CITATION:

加藤, 剛. 総合討論. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ:
総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて
1994, 2: 40-58

ISSUE DATE:

1994-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187419>

RIGHT:

総合討論

司 会 加 藤 剛

加藤 この2日間の報告は、単に違う地域が語られただけではなく、報告された方々のディシプリンのバックグラウンドも全く違っていた。タイトルをふりかえてみても、各々の地域が持っている切り口自体が反映されている印象を受けた。

そもそも、このような総合的地域研究をめぐる重点領域のアイデアが、中国や、中東イスラーム圏、あるいはインドから出てきたのではなく、東南アジアを研究の場としている人達から出てきたこと自体も、非常に興味深く感じた次第だ。

では、土屋さんの冒頭発言を皮切りに、総合討論に入ることにしよう。

冒頭発言

土 屋 健 治

私は常に、地域研究は成果が勝負である、作品の良し悪しが全てであると考えているが、時々、地域研究とは何かという原論を考えることの必要性を感じている。今回、坪内さんが設定された「地域性の形成をめぐる」というのは、ある意味で地域研究の文字通りの原点を考えてみようという話であったのだろう。実際に、切り口もバックグラウンドも違う報告がなされたが、それぞれの地域研究の原論や、地域に対する個人的な想いが語られ、非常に興味深く拝聴した。

そこで、この総合討論に向けて、いくつかの議論のポイントをまとめてみた。まず〈地域〉をめぐる「作法」と「文法」ということを考えてみた。地域性の形成とは、我々が考えているイメージとしての〈地域〉をめぐる、その間にとり結ぶ色々な関係がある。これを仮に「作法」という言葉でまとめ、〈地域〉に即して、〈地域〉から何か掘り出すことができるようなものを、〈地域〉をめぐる「文法」としてまとめてみた。

「作法」において常に問われるのは、地域研究者とは何か、あるいは地域研究とは何かということだろう。この点については、お互いに確認しあうことが重要ではないかと考えている。ここにいる“われわれ”とは、そもそも地域研究者と自覚しているのか。地域研究者とはどういう人のことをいうのか。それは何をどのように問おうとしているのか。単にそれだけでなく、地域研究者とは問われる立場にもあるようだ。何かを問われることが、地域研究者を地域研究者たらしめている一つの要件にもなるのだろう。

もう一つの大きな議論は、〈地域〉とは何かという議論であろう。〈地域〉とは観念なのか、実体なのか。山影さんは、観念であると明確に言い切っているが、掛谷さんにとっては、かけがえのない愛着空間であるという話もある。そして、誰が〈地域〉と言うのか。それは研究者が外側から言う〈地域〉な

のか。それは、そこに住んでいる人も納得できるようなものなのか。誰にとって〈地域〉なのかを確認しておくことが必要だろう。

地域概念そのものは、歴史的に区切られてきたものである。それは時には戦略的な被造物として、極めて人工的な空間として作り出される。だが、それを全て嘘として否定してしまうことにも問題がある。例えば1755年にできたジョクジャカルタ王国は、オランダ東インド会社と当時のマタラム王国の間の条約で成立した人工的な空間である。しかしできてしまえば、ジャワ王朝文化の最もオーセンティックな担い手であるという形に内容が変わってくる。

そういうことを含めて、〈地域〉の被規定性を常に確認しておいた方がいいだろう。

〈地域〉を作り出すものは、博物学であったり、探検であったり、あるいは植民地学やヨーロッパの社会科学でもあった。現に我々も、地域研究によって〈地域〉をつくろうとしているのではないか。色々な地域概念が、それぞれに歴史的な重さを持ち、時にその重さに耐えかねてウロウロしている。それがまた地域研究の一番の魅力でもあるのだろう。

次に、〈地域〉へのまなざし（視点、スタンス）という問題がある。研究者と〈地域〉との間にどういう関係がとり結ばれるのかについても、実は色々な考え方がある。愛着空間という地域へのまなざしもある。今はまだ無名だけれども、いつの日にかそれ自体の存

在が輝くような空間を夢見ている場合もある。これをどうして地域と言ってはいけないのか。他方、偏差値空間とでもいうような、一望千里を見渡せるような地域区分も理論的にはありうるし、それもまた一つのまなざしであるだろう。色々なレベルや性格のまなざしがある。

さらに、地域研究の「作法」というからには、それぞれの研究者があることを問うている、その問うている自分自身をさらに問いかえすという、知的な緊張関係の有無が関係してくると思う。それは、どこから見るのかという視点とも関係してくる。この場の議論では中心から見る視点ではなく、色々なサブセンターがあるという話や、周辺や境界からの視点が語られた。あるいは「外」と「内」との捉え方の問題をどう考えるのか。あるいは、ネットワークの問題をどう考えるのか。どこから見るのかというのは、単に方法の問題以上に、「作法」の問題と関係しているのではないだろうか。

そこで次に「文法」の問題だが、〈地域〉をどう考えるのか、観念か実体かという問題が残されている。だが、いずれにしても、いかにも“それらしい”まとまりがあるということではないか。それぞれの地域については、色々出てきたと思う。そこで“それらしい”ものが何かということについて、生態・生業・制度・象徴という、四つのレベルを考えてみた。生態と関連して成立する生態空

間がある。生業と関連しあう生活空間、制度と関連しあう政治空間、それから象徴と関連しあって成立している意味空間がある。このような様々な空間のありようが、“それ”を作っている中身であるということで、今回の五つの問題提起をおさえることができるのではないか。

この四つの層の空間のありようが調和的に存在していれば、そこにひとつの〈地域〉をつくり、風土をつくりあげていくが、現実には合従連衡や支配従属という関係のように、四層がきしみあう場合がある。この空間のあり方のダイナミズムによって、地域的な状況が変化してくる。ただ、四層の持つベクトルの相反性を通して地域を規定するというよりも、ベクトルの色々な相反性を通して、それぞれの地域が持つダイナミズムをみていく。そういうダイナミズムの方からみていった方が、より地域が明確に見えてくるのではないかという話が出されていたと思う。

ベクトルには、土地につくベクトルと、人につくベクトル、そしてどこに付くかというよりも、非常に抽象的に、全天蓋に鳴りわたるようなベクトルがある。それは技術、メッセージとか、ユニバーサリズムというものとして捉えられる。それぞれがいつも調和して響き合うというような話ではなく、どこかきしみ合っている。一枚の地図の上にも書こうとしても、とても書けない。そこがまさに面白いところではないか。

それでも、地域らしくなっているものを地域性と呼ぶのならば、それはある空間をつくりあげている磁場である。磁場とは、〇〇世界という形で置き換えることができる。そうすると、今度は幾つかの磁場の性質をみていくことができる。その極性は一極性なのか、多極的なのか、あるいは極性を持たない空間もあるだろう。そして、その磁場は脈動し、開いたり閉じたりする。それに呼応して、外の世界に向かって外向する場合と、内に向かって内向する場合がある。これは、地域そのものが持っている、地域の外に対する感受性の強弱、感度の良し悪しと関係しているように思う。非常に重要なのは、その脈動の歴史的变化だろう。大きな歴史的な変化が絶えず背後にあると考えておくべきだろう。

以上、「作法」と「文法」という形で、今までに出てきた問題点をまとめてみたが、さらにそこから展開して考えてみるとどうだろうか。一つは、「作法」と「文法」との往還をどう考えるのか問題がある。

また、ここに様々な地域の専門家達が、一堂に会している。この機会に地域間のつながりや比較を考えてみるべきだろう。地域間のつながりは、全人類史の脈動のリズムに関連している。具体的な事象と照らし合わせながら議論する道がないだろうか。

また、その特徴性を一目で見て取れないような空間として存在する〈地域〉もある。このような〈地域〉をどうするのかという問題

提起が出された。関本さんが出された「イスラムなしに中東を語れるか」というような問いかけも含めて、「翻訳・翻案する装置」を考えてみたい。その地域における「かけがえのないもの」、例えば、カーストは他の空間に全く翻訳できないような話なのか。あるいは何か別なものを使うと翻訳できるのか。もしそれができるならば、地域はそれぞれ違うという話ではなく、地域と地域をつなげていくような、新しい認識の方法や枠組ができてくるのではないか。

さらに気になるのが、ディアスポラのネットワークである。ヨーロッパのユダヤ人、東南アジアの華僑、華人は非常に大きな役割を果たしている。ディアスポラを普遍を担うものとして考えているが、これは〈地域〉と〈普遍〉との対峙の中で、〈地域〉から外に向かって開き、地域間をつないでいく要素として考えられはしないか。

結局、「地域性の形成」や「総合的地域の認識」というものは、21世紀における〈地域〉の運命を考えることではないか。一方で同化のベクトル、他方では異化のベクトルがある中で、〈地域〉はどうなっていくのだろうか。地域研究とは、世界の中の異種性、多様性を認識しようということが、出発点だったと思う。それを突き詰めて言えば、我々一人一人は、誰も誰にとって代わることはできないという意味で、絶対的な他者であるということだろう。そういうギリギリのと

ころでの他者性がありながら、他方では「宇宙船地球号」という、一種の文明共同体的なものがある。そういうベクトルのどこに、地域研究や、地域形成についての、我々の認識の礎を降ろしていくのか。それと我々の間は、どういう形で問うたり問われたりするのか。

「地域性の形成」ということがらのその行き着く先は、認識する対象は何なのかというところではないか。

白石昌也 中国とインドの場合では、地域と言いながらも、一つの国民国家を形成している特性があり、東南アジアや中東とは決定的に異なっている。地域という問題を論じる際にも、中国やインドと、他の地域とは、アプローチが違うのではないか。そういう異なった地域を横並びにして比較する場合に生じる問題点が、明らかにされたように思う。

東南アジアの中でもベトナムに関しては、中国の南北間の問題にうまく当てはめられることになる。そうになると、中国という一つの地域と東南アジアを比べるのではなく、むしろ中国と地域の中の一つの国であるベトナムを比べた方がいい。そういう側面も出てくるのではないか。

濱下 私には、これまでの中国像、あるいは中国認識に対して、それをどう再検討し批判するか、どう相対化するかという、非常に強い動機がある。それは、現在動いている地域主義というのは、どうも今まで議論されてき

たものとは、違う地域主義の現れ方をしている。それを中央からではなく地方から、あるいは北ではなく南、制度というよりも社会慣行から、閉鎖的な側面ではなく開放的な側面から考えようという立場をとりたい。とりわけ中国の場合は華僑、華人という広がりをも含めて見てみたい。

その点では、どういう角度から光を当てるかが問題だと言えるだろう。それによって現れてきた対象を仮に〈地域〉として切り取ってみる。その地域が果たして自立的、内的な統合性を持っているかどうか、対外関係を繋いでいるかどうかは、また別の問題だ。認識と実態の間に、地域としての合理性がありうる。地域の定義と自立性、あるいは地域への帰属感は、それぞれに違うし、違っているべきだと思う。この違いを前提として、認識か実態かを別の表現で分析し考えてみたい。

その意味では、掛谷さんの地域は、非常に帰属感に比重をおいた地域研究であろうし、高谷さんの地域世界の考えは、地域をどう定義するかというところにあるだろう。私はその中間で、地域にどういう自立性があるかを、ダイナミズムとしてみていきたいと思っている。

例えば、社会・慣行、あるいは南から中国を見ていくと、イスラームの問題が出てくる。人口統計を見てみると、中央の政策が変化すれば、少数民族の割合が増減する。やはり、漢族は作られた一つのマジョリティの意

識であり、必要に応じてそのマジョリティの傘の中に入るか、あるいは出るかという流動性がある。そういう面から中国研究をどう考え直すかということだ。そういう意味では、中国という表現自体の文化性の問題にも注意しなければならない。

應地 国民国家も一つの統一でありうる。インドには単なるカーストだけではなく、文化的にも「それらしきもの」がある。民族が国家を作り、国家を作れるものが民族だという言い方では、インドは国民国家と言えない。だが、国民国家を成立させるべき基盤を持っている点では、間違いなくそうだと言える。

土屋さんの冒頭発言は、「〈地域〉をめぐる作法と文法」という副題をつけられていたが、「作法」の最初で言われた「地域研究者」とは、この場合、「地域を研究する者」なのか、あるいは「地域研究をする者」なのか。どちらの意味で使うかで、ニュアンスも概念も、非常に違ってくる。

地域研究というものの自身の存在性に、まだ議論がある。地域研究をするという場合、コアとして確立されたものをまだ持っていない。それに対して自分がどう思うかは重要な問題であろう。単に地域を研究するということであれば、誰もが簡単に入れるものだ。表現上の問題ではあるが、「地域研究をする者」であるかどうかという問いかけである。

土屋 まさにそのとおりだ。今日のテーマが「地域性の形成」ということもあって、「地

域をめぐる」としたが、今のような意味で言えば、これは「地域研究をする者」ということになる。

山下晋司 国際関係、あるいは政治学では、「民族」は国家を持つことができる民族主体を言い、人類学で使われているような民族集団、部族、種族というのは「民族」とは言わない。そのへんの用語の問題をどうするのか。「それらしきもの」で示された構成では、人々、あるいはそれに対する民族観が欠けている。それは入れた方がいいのかどうか。

アフリカの場合、部族という言葉が差別につながるとして、それに代わり民族という言葉が使われるケースが非常に多い。だが、アメリカインディアンでは部族を使っている。東南アジアでは民族が使われたり、種族が使われたりしている。そういう国語上の混乱もあり、我々が地域研究に携わるときに、どのような言葉を使っていくのか、検討しておくべきではないか。

山影 国際政治学の分野で使われている「民族」を、全ての研究者に使えと言っているわけではない。民族学での「民族」という単位は、ある人間集団の特徴や生き方が、どの単位で有効性を持つかで規定されるものである。問題は、英語でいう「ネーション」という言葉が、日本語では「国民」と「民族」の両方に訳される。むしろ英語の民族の方が曖昧だと言える。日本語のように民族と国民を

使い分けた方が、人間集団の持っている政治的な特徴や、混沌とした状況をより明確に見ることができると思う。

ただ、その時の「ネーション」と、日本語で言っている「民族」とは違う。例えば、多民族国家インドネシアと言うとき、インドネシア語でバンサと言え、インドネシア全体をくくる言葉である。各民族集団はスク・バンサになるが、それを民族と定義して、インドネシア・ナショナリズムをインドネシア民族主義と訳すと、どのレベルの人間集団の、どの行動を扱っているのか混乱するだろう。特に異なる分野の研究者と議論する場合は、どのレベルの人間集団を指して議論しているかを明確にしておかなければ、議論の把握自体がうまくいかない。その意味で、ディシプリンによって使い方が違うことだけを確認したのだ。

言葉の統一というのは、なかなかディシプリンを越えて行きにくいところがある。ただ「民族」とは一つの国家を持てる集団だと、英語では使われていることを認識しておいてほしい。この20世紀においては、国家を持てるか持てないかという認識によって、非常に意味が変わることを意識する必要があるだろう。

加藤 逆に言うと、国際政治の中では、国家を持てるところまで行かないような、人類学で言うような民族集団に匹敵する、ターミノロジーがないのだろうか。

山影 それは民族集団や、エスニックグループ、場合によってはマイノリティという言葉を使っているが、ある集団が国際社会で政治化し、何か発言をする場合には、自分達を「民族」と自称する。それを認めることは、独立をも認めるのだということを常に意識しなければならない。クルド人はクルド民族か、モロと称している人はモロ民族なのかということが、政治的には問題になる。民族学的なレベルとは、また異なるということだ。

土屋 「民族」とは歴史的な概念であり、歴史的な状況の中で、ある制度を作りだそうとしている人達が民族であったり、あるいは作り上げた制度を担っている人が民族であったり、あるいは、ある意味を共有している人達を民族と名付けたり、ある意味を共有することで、彼ら自身が民族となっていったりというように、それは色々なケースがあると思う。

山下さんの言う意味での民族は、「文法」で挙げた生態・生業・制度・象徴の中では、制度と象徴の中に一番強く表れるのではないかと思う。

山下 現在の民族問題といった場合、エスニシティが政治化してナショナリズムの要求に結びつくという、エスノ・ナショナリズムということがある。実態概念としては、民族も、エスニックグループも区別できないのではないか。その意味では、全て「民族」でいいのではないかと思う。

小杉 地域を考えるとときに、地域研究の対象としての〈地域〉がある。それを地域同士が互いに識別し合うことがある。「アフリカ」はアフリカ大陸を指すのだろうが、アフリカ研究では北アフリカを外すというように、地域研究同士のポリティクスのような部分があると思う。それは「作法」の部分に関わる問題ではないか。

南アジアで気になったのは、パキスタンの位置づけである。パキスタンはインド大陸の中に入るという理解をしてきたが、この20年ぐらいの間に、アフガニスタン問題にも絡んで、中東として取り扱う場合も出てきた。ただ、私が提起したアラビア語圏、トルコ語圏、イラン諸語圏という三つの分割からは外れてしまう。また、インドという地域と国民国家とが重なり合っているという議論があったが、パキスタン、バングラデシュ、スリランカを入れた場合どう考えていくのか。

また、「インド地域研究」という言葉は、安定した言葉なのか。その時のインドは、現在ある国のインドではなく、インド亜大陸を指すのか。そのことも含めて、どこに境界があるのかを確認しておきたい。

土屋 我々は研究が進むに従い、よその世界も見たくなる。自分達の知っている世界との大きな隔たりに気がつくこともあるが、大いなるつながりに改めて目をみはることもある。地域研究者が時としてエクспанションリストのごとく、その研究の範囲を広げて

いくのは、地域研究者それ自身が持つ一つの自然な生理ではないか。

それを地域研究者間のテリトリーという問題として受けとめるのではなく、互いにエクステンションをしていく中で、異なる地域研究者どうしの新しい共同研究の可能性を考えれば、様々な地域間のつながりを考えていく上で、非常に大きな役割を果たすと思う。これは積極的に考えていきたい問題だ。

北アフリカとサハラ以南のアフリカを分けることは、極めてリーズナブルなことであり、アフリカという名前にこだわり、一緒にしなければならないというのは、ほとんど意味のないことではないか。北アフリカ地域をイスラーム世界と見たり、地中海世界と見る見方もあるが、地域のまとまりとして考えれば当然のことではないか。

應地 今日の問題提起では、インドという言葉を使っている。パキスタンについては、まだ考えがまとまっていない。土屋さんの出された四つの空間概念の中に時間の概念を入れた場合、歴史空間や歴史的世界が考えられる。そういう意味で言えば、パキスタンは明らかに南アジアだと思う。そういうものを含めた形で、次の展開を考えてみたい。

「インド地域研究」という言葉は、熟した言葉ではない。ただ、インド研究と言うと、その中に入る要素は非常に多くなる。サンスクリットに基づく古典研究まで含める人もい

る。敢えて現代研究を含意するために、「地域研究」という言葉を使った。

土屋 関本さんから、イスラームなしに中東を説明するような、一種の知的な操作ができないかという話があったが、関本さん自身は東南アジアについてはどう考えるのか。

関本 地域がそれを見る人の視点に応じて切り取られたものだとすれば、例えば、世界は東南アジア、南アジア、中東、サハラ以南のアフリカという地域に分けられているというような前提というのは、取り払ってもいい。色々な地域論があることになる。

そこで、東南アジアという地域は存在しないという立場と、あるのだという立場が、現に東南アジアを研究している人間の中でも二つある。その論議をもっと前面に出してもいいと思う。私の立場としては、現に世界的な常識として存在し、東南アジアという概念を使って物事を考えている以上、あるのだと答えるだろう。東南アジアがないという場合、地域研究という資格すら成り立たないというラジカルな主張であれば面白いが、そうでなければあまり議論しても仕方がない。東南アジアを所与として認めた上で、なぜそういう所与があるのかを考えていくべきだろう。

東南アジア全体を一つの共通分母でくくれるのかどうかはわからないが、幾つかのクラスターでは似ているという感覚がある。一般的な東南アジアの人達にとって、東南アジアという概念はほとんど存在しないと思うが、

日常的な概念の中に、ASEANという地域があるらしいということは知っている。そして、彼ら自身も、東南アジアの内部の多様性の中に、何か漠然とした相似を認めるところもあるだろうと思う。

土屋さんが言われている〈地域〉は、東南アジアという地域があるということを念頭においているのか。あるいは、ジャワ世界というものがあり、それに対比されるマレー世界があるという、そういう細かい視点を主に念頭においているのか。

土屋 この冒頭発言では、問題提起で示されたような〈地域〉の大きさを考えている。ただし、それに関わらず、意味空間、政治空間、生活空間、生態空間というのは、もっと小さな単位となるだろう。例えばジャワ、場合によってはバリとか、そういう単位でも意味があれば、〈地域〉として成立すると思う。そのへんは伸縮自在に考えている。

小杉 東南アジアというのは非常に弱い空間で、特徴を断定することが難しいという話題は、幾度となく聞いているが、そこで議論される中東は、何か非常に確固たるものがあると、自明のように語られていることが気になる。中東を規定したのは欧米で、特にイギリスとアメリカの影響力は未だに強く残っている。湾岸戦争で遂行されたことが、それを表していると思う。中東という地域概念も、中東の人々の認識によるものではなく、国際社会の中で言われたことを消極的に受け入れて

きたにすぎない。積極的に使い出したのは、せいぜい、ここ10年～15年ぐらいのことだろう。

地域における観念は、実態とは必ずしも一致しない。地域の人々が持っている観念は、規定された観念もあれば、それを逆にとることもある。実態にしても、地域そのものの実態はもとより、地域を区切るような諸力が外からかかっていることも、実態の一部だろう。内側からの実態と外側からの実態、内側からの観念と外側からの観念がある。外から論じられたものを「中東」と言いきっていいのかという問題もある。しかし、そういう所与のものである地域として、我々は中東の特性を探ろうとしている。

そこで気になるのは、強い空間とか弱い空間というときに、東南アジアは弱い、中東は強いというのが、常に自明視されていると思う。中東研究者としては、それをどう理解すればいいのか。例えば、中東ではイスラームとアラビア語が当たり前のことだからという議論では納得できない。イランやトルコでは、アラビア語はそれ自体では意味をもたないし、トルコは、長い間、脱イスラーム化の路線を歩んできた。私の言う、イスラーム化・アラブ化というのは完全な操作概念で、観念の地域である中東を規定するもので、現地の人が実態として納得するものではない。

さらに言えば、イスラーム化・アラブ化とは、中東をさらに細分化する装置であり、イ

スラーム化とアラブ化の位相や、次元が場所によって違うという話になる。イスラームとアラブにおいて、中東が一つであるということと言いたいわけではない。中東については、もう少し柔軟に考えてもらった方が、お互いの接点を持ちやすいのではないかと思います。

高谷 我々は、「強い生態、弱い生態」ということは言っていたが、いつのまにか、「強い空間、弱い空間」と勝手に言われている。特にその点を取りあげて議論する必要はないのではないかと。

加藤 京大の東南アジアセンターでは、「地域研究とは何か」という議論が話題になる。その一つの背景には、地域的な名称を冠する研究所ができること自体に、「地域研究とは何か」ということを考えるモメンタムが出てくると思う。

この機会に、他の地域的な名称を冠した研究施設に属している方達が、地域研究についてどう考えられているのか聞いてみたい。

石井 アジア・アフリカ言語文化研究所では、かなり以前に、「アジア」というまとまりは、それ自体としては、ありえないのではないかという議論をする言語学者がいた。その場合には、ヨーロッパが規定した形で、初めてアジアが一つのまとまりとして現れてきたのではないかという、規定の問題に行き着いたのではなかったかと記憶している。

地域を規定する場合に、土屋さんの言われ

た「作法」の「誰にとっての地域か」ということが非常に問題になる。例えばアジアとか、例えばアフリカとか、非常に大きな地域を問題にする場合に、それを規定した他者としてのヨーロッパを意識せざるをえない。そこから敷衍すれば、例えばアジアの中の小さい地域を考えるにも、誰にとっての地域かということにおいて、外から見て規定する、または外との対比において規定される地域をおさえておくのは、我々にとってかなり重要なことだろう。

小杉さんの質問で、南アジアにおけるパキスタンの問題が出ていたが、なぜ、バングラデシュはどうかという話が並行的に出ないのだろうと思った。おそらく中東から見た場合に、南アジア世界の中のパキスタンとバングラデシュというのは別物に見える現象があったのではないかと。外から見た場合に、南アジア世界が必ずしも一様に見えなかったのかという疑問がある。南アジアの研究者にとっては、もっと細かい区分の方が気になるところだろうが、それでも全体として具体的なまとまりのあるような範囲を設定する事は可能だと思ひ、色々な重層性があって、見方によって色々に切れることも確かだろう。

結論的なことは言えないが、誰にとっての地域かを考えるときには、内側からの視点と、外側からの視点という両方を付け合わせながら考えることが必要なのだろう。

関本 東洋文化研究所では、あまりそういう

話題が議論されたことはないと思う。「東洋」という言葉自体、西洋に対して東洋を重視しなくてはいけないとか、東洋の人間の共通性を認識しなければならないというのは、あまりにもリアリティがない。おそらく時代のコンテキストからはずれてしまっているのではないか。内部で自分は中国研究者だとか、中東研究者だとか、そういう主張はある。

松田素二 先程、アフリカ研究者が、アフリカ地域を考える場合に、北アフリカを外してサハラ以南を考えるという話もあったが、全ての研究者がそう思っているわけではない。地域とは、基本的に生活している人々が自ら作り出した概念ではない。アフリカにおいてもそのとおりで、北アフリカと西アフリカ、東アフリカと、様々なバリエーションがある。地域概念とは、ある種の外在的な権力作用の中でしか生まれないものではないか。その意味で、ニュートラルな地域像については極めて懐疑的だ。

1980年代あたりから、サイードのオリエンタリズムの反映もあって、ヨーロッパの視線によって作られたという反動で、「アフリカ」というものが作られてきたというインベンションが、アフリカ人自身の間から出てきた経緯がある。しかし、基本的には大きな地域をめぐる権力作用の中で出てきたことは否めない。

そういう意味で、こういう地域像、あるい

は地域をめぐる様々な議論を通して、いったい何が見えてくるのか、具体的にどういう道が開けてくるのかということが、もう一つはっきりしない。もちろん、現在の東南アジアや、アフリカというものが、18、19世紀のイギリスの世界分割、そして20世紀のアメリカの世界戦略の中で確定され、東南アジアにはASEAN、アフリカにはOAUというポリティが作られてくる。そういう鑄型が作られれば、その中で人為的にひかれたバウンダリーを我がものにしようとするクリエイティビティは、世界各地で色々な人が発揮していくことになる。

つまり、地域とは、ある種の権力作用が伴わない限りは成立しない。普通のアフリカの人達は、地域も、地域像というコンセプトも必要としていない。にもかかわらず地域を考えるとすれば、何かがそこで見えてこなければならない。ニュートラルな、権力作用からフリーな地域像というものは存在しえない。新たな地域像が提起できれば、色々な議論がまたできるのではないかと思う。どのような地域像を何のために作るのかを考えておく必要がある。

地域像とは、権力作用によって外在的に押しつけられたものではあるが、外在的な鑄型を中から崩して、我がものになっている生活世界もアフリカで見ることができる。内在的なクリエイティビティというか、アフリカの人々にとって意味のあるまともに自分をお

きたいという、そういうことが、我々アフリカ研究者の地域像の出発点にあると思う。

小杉 地域の実態を考えると、中東が世界システムのサブシステムとして作られたとしても、それ自体の内在的な「中東域内政治システム」が作られたわけではない。実態としてあるのは、アラブ域内政治システムである。その場合に、イスラエルを排除するのはもちろん、トルコともイランとも切れている。アラブ域内というレベルでは、実際に大きな交流もあり、統合の動きも進んでいた。

それが80年代、イラン革命以降には、イスラーム的な理念が出てきて、従来のアラブの枠組みが、一部で溶解し、アラブ以外の国との接近が見られる。また、レバノンの15年間の内戦終結のために、サウジアラビアが自国のターイフで、レバノンの国会議員を全員集めて、妥協のため会議をさせたり、それと平行して、ターイフ方式の合意に反対するレバノン諸勢力が、テヘランに集まって会議をしている。80年代以前では考えられなかったことであり、アラブ域内政治システムの変容を感じている。

また、1945年にできたアラブ連盟は、アラブ域内システムの始まりにすぎなかった。実際に我々が認識しているような形のシステムができてくるのは、70年代に入ってからだ。それまでは、湾岸諸国にはイギリスの勢力がある。イスラーム諸国会議機構ができたのも71年で、認識のレベルのイスラーム世界はそ

の前からあっても、交流がそういう水準で行われるようになったのは最近のことにすぎない。

先程、パキスタンとバングラデシュの問題が出ていたが、パキスタンは昔の中東の域内政治とは必ずしも連動していなかったが、アフガニスタンの問題を契機として、強く中東とつながってくる。イギリスが出ていった後、湾岸の国では軍隊の一部にパキスタン兵を起用したこともあり、簡単にインドや中東と切ってなくなってきた。それに対してバングラデシュは、出稼ぎの人は来ているが、地域機構レベルでの交流は、そこまで展開していない。こういうことが質問の背景にあった。

加藤 中華、あるいは中国を考える場合に、一方で求心性がありながら、中華的なものが拡大し、二つの折り合わせのダイナミズムが指摘された。一方では、中東をイスラーム・アラブと置き換えれば、これもまた外に拡大していくような世界である。一方で、高谷さんからは移動する人の地域性という問題提起があった。地域性の動態論も念頭におき、拡大する地域、世界を取り込むような地域性の原動力について、小杉さんと濱下さんにコメントしていただきたい。

小杉 まず質問だが、中国世界が広がるというときには、全てが中国化していくと捉えられるのか。つまり、そこにいる人が中国人になった範囲なのか、あるいは中国人が出て

いった範囲が拡大していくのか。それをイスラームと比べたとき、イスラーム世界と呼ばれる領域が広がっていることを拡大と捉えることはできるが、イスラーム化が進むことを拡大と言うのは問題だろう。たとえばインドネシアがイスラーム化したのを、イスラーム世界とくくることができるが、それによって、インドネシア人でなくなるわけではない。イスラーム世界というのは、拡大ではなく、拡散しているのではないかと思う。

イスラーム世界の場合、中心地というのは厳密にはない。中東が中心だと言っても、聖地や、ある種の機能はあるが、それはイスラーム世界全体がネットワーク化する結接点でしかない。中心化し、それをどこかに押し出していくものではない。イスラーム化やアラブ化という言葉を使っているのは、中東やアラブ諸国自体が、イスラーム化したりアラブ化した所という意味であり、そこから外側の部分が拡大した地域だとすることもできない。イスラームで捉えればイスラーム世界だが、イスラームは必ず地域において「地域化」し、地域の要素の一つとしても捉えられる。それは中国の場合とは違うように思う。

濱下 拡大かどうかというのは、中国の場合でも問題だと言える。ただ、外から見れば、覇権という形での拡大主義に受けとめられる。内部から見れば、おそらく内部の流動性の延長線上であり、中国、あるいは中華というものが、物理的に膨張するというイメージ

ではないだろう。

それは、海外の華人社会や、華僑のネットワークで結ばれていくような動きもあるし、少数民族が漢人を名乗り漢化する動きもある。移動によって広がるのではなく、何かが新しく加わることで拡大し、境界領域にエネルギーが集中するという形で考えられるだろう。

私の趣旨としては、人の移動によって地域がアイデンティファイされるという側面から地域を考えたい。地域の実態と研究者、あるいは地域の実態と権力の視点という指摘があったが、むしろ、人が動くという社会的なモビリティの中で地域が認識されていくことを考えれば、地域の実態と、研究者や権力の間に、このモビリティをを入れて考えるべきではないか。例えば、インドで言語と州の境が対応する中で、そこにおけるマイノリティはどう表現されるのか。そういう部分の動きを見ることから、地域を考えることができないかと思っている。

中華世界では、高谷さんから指摘された構図を上下関係の層におきなおし、これを横から見ると、非常に興味深いのではないかと考え始めている。中華世界の外枠は、むしろ理念的なものとして、それ自身が自己世界像として上位に位置するとすれば、やや実態に近い海外華僑や回民というのは、もう少し下位に存在する。地域像を層化して考えてみることによって、それぞれの層のカバーしようと

する地域像も違ってくるだろう。中華世界レベルの理念と、広域地域というイメージ、さらにもう少しローカルなイメージは、相互に結びついたり、あるいは飛び越えたりする形で、自分を主張し表現するだろう。

それから、よりローカルなコアのような、例えば農村の中国人で、中国が広いと思っている人は一人もおらず、だいたい一生の行動半径は非常に狭い。そういう点では、例えば都市の空間とそれ以外、あるいは都市間のネットワークの距離感と、都市と農村の距離感も非常に違う。地域を考える場合、もう少し幾つか他の装置を中にインプットして考えてみる必要はないか。

インド世界には、中華世界の理念や、イスラーム世界に対応するような、自らの一つの世界像、世界観はありうるのか。その下位に位置する異質な部分とブリッジするような社会的な仕組みは、どのようにあるのだろうか。人が動いたり、あるいは制度が変わったり、あるいは中央と地方が相互に交代するエネルギーを示すようなことによって、例えば、インドにおける州と州のボーダーが、どのようにブリッジされるのかという、モビリティの問題の点について質問したい。

高谷 坪内さんがこの研究会の冒頭で、中国、インド、中東、アフリカ、東南アジアを選び、そういう地域の地域性を際立たせる要素は何かを考えていこう、という趣旨を述べられた。その点に即していうならば私が考え

ているのは、人間と自然との勢力関係ということだ。人間が優越しているところと、自然が優越しているところがあるということだ。サハラから中東を通り、新疆を通して中国まで行く。これは、人間の優越している世界だろう。それに対して、アフリカと東南アジアは、人間のいない森であった。最初に、「人間」の世界と「森」の世界に分けて考えてみたらどうか。人間のところは、生態を重視するよりも文化領域と考えた方がいい。人間集団をまとめていく基本的原理があり、それが強力なのだろう。それが文明だと思う。

私が各地域に対して抱いているイメージを簡単に言うと、中国における中華思想の広がり、池の中に石を投げた時に、波紋が同心円上に広がっていくあれに似ているように思う。濱下さんは、波紋の周辺に目をとめてそこからの話をされたと思う。天気図の等高線のようなものが幾つもあると言われたが、その通りだろう。だが見方を変えると、中原という大きな高圧部分があって、そこから周辺に波紋が広がり、それが脈動しているように見てもよいように思う。

イスラーム圏は、水の上に油を落としたようなイメージだ。落とした瞬間に中心もなくなって広がっていく。その下にはアラブがあったり、トルコがあったり、イランがあったりするが、その上をイスラームという油のフィルムが覆っている。それぞれを我々は一つのリージョンとしても考えてもいいのでは

ないか。

インドは吸取紙の上にインクを落としたような感じだ。上面にひいてしまって、剥がそうと思っても剥がれない。イスラームが発達しているオアシス圏というのは、人が動いているが、インドは百姓の世界だ。そこに入り込んだカーストというのは動かない。吸取紙に吸い付けられたような感じがある。このように地域というのはエコロジーと生業と文化との絡み合いから出てくるイメージで表すことができる。

それに比べると、アフリカや東南アジアは森の優越した世界だ。そしてアフリカは、やはり森の大陸である。外部からの大文明の影響を受けなくて、人間は元々の格好で歩いている。掛谷さん流に言えば、サヘルやスワヒリは文明に汚染された世界で、本当のアフリカは疎開林・熱帯林の世界だ。一方、東南アジアは海の世界でもあり、来るなどと言っても外の文明は流れ込んでくる。極めてサヘル的だ。だが同時に、森でもある。暴論かもしれないが、我々生態学者が歩いて得た感覚から言えば、地域性というのはこのようなものとして表すことができる。

加藤 最後にこの研究集会をふりかえって、発表者が「まとめ」の発言をしてほしい。

(ただし掛谷氏は欠席)

濱下 中国を地域として捉えようとする視点は、中国をどう相対化するかという意味においても非常に重要だと思う。歴史的な流れの

中で、中国の地域的なダイナミズムを考えたい。現在、注目されている華南経済圏や大中華経済圏、あるいは様々な改革開放路線の下での地域主義の登場も、日本の関わり方も含めて、今後の研究に大きな動機を与えている。

他方、私の地域研究のアプローチは、地域という対象が前提され枠づけられているのではなく、どういう分析、枠組みでその地域を照らし出そうとするかというところに注意し、地域のダイナミズムから考えていきたい。中央と地方(集と散)、北と南、官と民(制度と慣行)、閉と開(華僑、華人の問題も含む)という視点を当てはめると、中国自体がこういうダイナミズムによって作り上げられた地域世界であると言えるだろう。

中華、中国、民族という関係の中で、中国が一つの接点として、一方では国民国家を代表する表現をとるが、他方、中華と民族、あるいはその中の地域を色濃く残した形を持っている。近代の知識人は中国という表現が国を当てはめるに十分な表現ではないことに気づいていた。そこで中国を一種の中華と民族との折衷という形で利用したことは、歴史的に留意しておきたい。

討論の過程では、高谷さんの指摘で、空間の広がりと同時に理念のレベルとして、あるいは理念と実態の関係として、層として横にしてみるという課題をいただいたように思う。他地域との関係を考えると、アフリカの

地域それ自身が一つの世界を作っているという意味で、研究の対象としての地域としては非常に強力な世界を作っていると思う。應地さんの中国に対する指摘からは、漢族をどのようにして周縁から見るかという課題があると思う。それと同時に、應地さんの手法にモビリティというファクターを入れて中国を考えると、どういう地図が描けるかという課題を与えられた。

関本さんからは、中国という言葉を使わずに、この地域を説明できるかという問題提起がされたが、中華というコアから説明されることが多く、難問を与えられた気がする。飯島さんから出された、南と北における中国とインドの社会比較も、最近の中国研究の成果とこれまでの蓄積を踏まえれば、新しい局面でマクロな議論ができるのではないと思う。

全体的な感想としては、今回は中国という表現で地域を考えてきたが、東アジアという形で、地域を他と並べるような視点を考えることも必要だろう。朝鮮社会や日本も、中国との文脈の中で考えれば、どういう議論が生じるか。東南アジアとのブリッジはどう考えられるか。同様に北東アジア、つまりロシアと中国の東北地方の関係、あるいは朝鮮半島の北部に当たる地域なども、その視野に入れて考えてみたいと思った。

小杉 生態環境、歴史性を重視し、あるいはその蓄積を含めた上で、現在から未来へと展

開していく地域をどう捉えるか、地域それ自体がどう形成しているかということを提起したいと思った。その中で、文化的要素が非常に強い場合について、幾つか具体例を挙げながら考えてみたが、他の地域と様々な論点の中で接触があり、啓発されることが多かった。

私の問題提起は、文化的側面や意味世界の問題を強調したが、当然、小さな世界観と大きな世界観とが重層的な構造をなしていて、中東の中にも生業や生態があり、その下部で形成されている世界観もある。これから地域性の形成を論じていく中で、具体的に提起していくべき問題になるだろう。

イスラーム化とアラブ化という提起は、他のところとの比較で興味深い問題点が出たと思う。同時に今回は、イスラーム化やアラブ化の中身が何かというのを論じなかった。中東地域の中の論理だけで物事を展開するのではなく、翻案する装置を開発していくことが必要だと考えさせられた。

最後に、高谷さんが提起されたイスラーム世界としての中東は、確かにそのとおりだと思う。それを「中東」と呼んだときには、「東南アジア」と呼んだときに提起されたことと共通する問題が非常に多いと感じた。今後のすりあわせの中で、色々と検討したい問題である。

應地 私自身、なぜ南アジアでコミュニティ・スタディをやるのかという問題がある。それ

までは、イラン、アフガニスタン、西アフリカのサヘルで調査をしてきたが、その中でインドという地域研究における準拠枠の欠落を非常に痛感する。それゆえ、インドは一つの地域であると言いたい。そういう願望が先に立つ。そこでカーストを中心に議論を展開したが、一つの大きな要素であるが、それで全部がくくれるとは思っていない。生活文化に関わるものまで含めて、南アジア全体の中の地域差の問題を考えたい。基本的には、南アジアは歴史的に多くの中心が存在する。そういう形で統合された、ルーズな結合を持った全体社会だと考えている。そういうことをこれからも具体的に示していきたい。

濱下さんから、インドの統一は何かという質問があった。中国との対比で言うと、多中心とも関係すると思う。インドでは「知」はブラーマンによって伝統的に独占されている。サンスクリット文献は彼らのものであり、他のものは近づけないものであった。そのかわり、ブラーマンはあちこちに分散している。中国の場合は、四書五経は開放されており、科挙の試験の合格者達が中央に集められていくという、一点中心的な「知」の構造を持っている。インドは多中心的な形であり、ブラーマンの生活様式を真似するような、サンスクリットという形で色々な動きがある。

関本さんの、カーストをはずしてインドを語った方がいいのではないかという問題提起

は、そのとおりだと思う。今回の発表でも、カースト論ではなく、ジャーティの持つ村を越えた広域的なつながりという側面を強調してみた。そういうネットワークから言えば、私自身の一つの課題として、コミュニティ・スタディをやりながら、村なら村、国家なら国家という一つの統一体と、その中間にある重層化された地域的な組織をどう取り出し、その重層性のメカニズムを明らかにするかということに関心がある。重層的な空間組織のメカニズムがインド世界をどのように語り継ぐのかを究極的に行うことによって、カースト論とは違う展開をしたいと思っている。

山影 便宜的にせよ、暴力的にせよ、区切られ、我々が東南アジアという名前で語っている地図上の空間がある。そこには生態、生業、制度、流通というような色々なものが見られるが、我々が何とはなしに捉える東南アジアに、東南アジアらしさが与えられるとするなら、東南アジアという空間だけを見ていてもわからないという仮説がある。我々の研究グループは、空間的な東南アジアの周りの人々を意図的に念頭におき、その関わり合いの中から東南アジアを見ていこうというアプローチをとっている。

果たしてそういうアプローチで見えてくる東南アジアのイメージが、東南アジアの内部を深く探っている人のイメージと、どれだけ共有するところがあるのかは、実のところよくわからない。だが、東南アジアの多様なイ

メージの一つが、外の世界との関わり合いで見えてくる部分もあるだろう。

今日の問題提起では、国民国家の比重を敢えて強調したが、全体としては国民国家という概念が外から導入されることも、一つの地域連関だろう。他にも、経済、あるいは華僑のネットワーク、様々なものがこの空間としての東南アジアと関わることによって、東南アジアの人々とある種の相互作用を引き起こしている。それが東南アジアを分解するのではなく、むしろ東南アジアとして浮き上がらせるような作用があったように思う。

総括発言

坪 内 良 博

地域性と地域という言葉の区別を明確にしないままスタートさせたのが、最後まで尾を引いていた。曖昧さはそこに残るが、そこがまた面白いという形で終わろうとしている。地域とは何かを考えずに地域性を議論すると、どういう問題が出てくるのか。そこでもう一度、地域を考えてみると、地域というのは一つの重層的な構造を持っていることを意識する必要性に気付く。例えば中国の中に地域がある、あるいは地域としての中国がある、あるいは中国を越えた東アジアという地域がある。このような重層的な捉え方をまず頭の中に入れないと、地域というのは捉えにくいのではないかという印象を受けた。さら

にこのように分けた地域は、地理的区分とどう重なっていくか。地理的区分と地域性との関係は何かという問題が出てくるだろう。地域区分としての地理的な区分は本当に可能なのか、本当はできないものだろうかということも感じた。

そういう中で、地域とは固定した単位であろうかという疑問も浮かび上がってくる。地域とは固定した永続的な存在であるのか、それともある種の問題関心に従って作られ、そういう形で発現していくものだろうか。本来はこのような問題を踏まえながら、地域性の議論を進めるべきだったのだろうという反省を込めて、今後の問題にしたいと感じた次第だ。

地域を考え、そこで地域性を考えたとき、地域性の発現に関わる要素として何に注目すべきかという問題がある。これを今回の主なテーマとして設定したが、五つの地域からは見事に異なる見解が出た。このような違いは、それぞれの地域で出されたキーワードの背景の中に、異なった地域の地域研究が専門の違いを越えて、何か特別な対象への関心の集中を要請するのか、あるいはそれ故に地域に応じて専門の違いを要請するのかという面白さを感じた次第だ。

地域性を捉える場合に、地域によって地域の特徴が発現してくる局面の違いがある。それはイデオロギーであり、制度であり、生業であり、生態である。地域性の表現において

発現の局面のどの部分を重視したら地域性が最も適切に表現できるのか。そこでは地域研究の方法が多様であるべきかという問題も出てくるように思った。

私どもの東南アジア研究では、生態を重要視しようという意識が働いている。東南アジアはそれだけ生態環境が重要なところと言えよう。だが、別の地域においては、重点の違いがあってもいい。しかし、地域により全く違った方法をとるべきか。あるいは、あらゆる

地域について、生態、生業、制度、イデオロギーというセット的な見方を取り入れて、その中の重要部分に特に目を注ぐべきなのかという問題が出てくる。これも今後の課題として残さなければならない。

議論は、今後、3年間でもっと深めていくことにしよう。極めて有益な研究集会が持てたことを感謝し、今後もスムーズに進展して行くことを念じながら、総括発言とさせていただきます。